

# 秋から冬への大学美術館 2002.11>>>2003.2

## 鍛金 伊藤廣利の世界

本郷寛



霞鍛金銀象嵌「神庫」 鉄、真鍮、金銀象嵌 27 x 60 x 28cm

課程を修了されました。引き続き工芸科鍛金研究室の一員になられ、亡くなられる一九九八年まで本学で教育と研究に携わってこられました。なかでも、一九八四年には工芸科鍛金研究室より美術教育研究室に移籍され、特に工芸教育に尽力されてこられました。

先生は、金属工芸作家として日展を中心に活躍され、工芸の伝統的技法と精神に裏付けられた優れた作品を数多く制作されました。そして、金属工芸の世界で、主に鉄を使った鍛造の作品で、精神性の強い独自の世界を示されております。また、その作品の質と技量は広く国内外を通じて高く評価されています。

この度、一九九八(平成十)年十二月に急逝されました美術教育教授伊藤廣利先生の遺作展「鍛金 伊藤廣利の世界」が、十一月七日(木)から十一月二十四日(日)まで、大学美術館陳列館で開催されます。先生は一九五九(昭和三四)年工芸科(金工)に入学後、鍛金を専攻されました。そして、一九六五年には、本学に大学院が設置された第一回目の大学院生として修士

本展では、こうした生涯を通して残された作品群のなかから、約八 点の作品を展示する計画です。そして、鍛金の技法が創り出す優れた金属造形の美しさ、工芸家・伊藤廣利の精神世界が展覧できるように準備を進めております。また、制作を通して培われる人間性を大切にしてこられた先生の美術教育観も感じとれる展覧会をめざしております。多くの方々にご覧いただけることを願っております。【美術教育研究室・工芸科鍛金研究室共催】  
(ほんごう・ひろしノ美術教育研究室助教授)

## 二箇所 絵画場から絵画衝動へ 中西夏之

無秩序に巡回するいくつかの言葉……

中西夏之

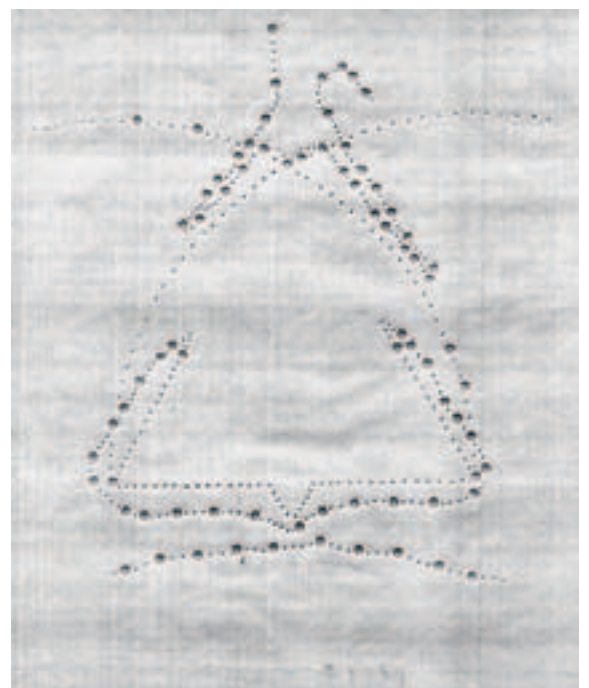
この展覧会を企てるにあたって、いくつかの言葉が無秩序に頭上を巡回している。

それは、紫を塗る、中、犬吠崎、西、不忍池、夏、山手線、絵画場、紫で還元

鶴と同時に、二箇所、豚、絵画衝動、等等でこれらが展覧会の構成上どんな位置と意味をなしてゆくのかいまだ流動的である。

東京芸術大学美術学部絵画科。このたび退任する教師は絵画科に属している。絵画が大学構制にも位置づけられた順序、即ち芸術 美術 絵画という類概念の流れの下端に置かれているのは理由のあることで、下方にあっても上位を受けて立つということである。他の種のものではそうはゆかない。美術の他の種のもは概ねモノに触れ、変形、加工する。しかし、絵の態度はひたすら眼前のものを受け入れるが触れることはない。他の種の制作物をも眼前のモノとして引受ける。触れることなく写す。それは作ることでない。また作らないことでもない。生まれ、現わしめるようにすることであり、その為にはモノには直接、手を触れず間接的に遠隔地からの操作が技法として発明される。

山手線は、水平に大きな環をなして東京中心部を区切り取り、円循環し、東京湾



「右手と左手の間の正三角形」17.5 x 14cm

の水面が作る湾岸の円弧と接する。

美術館のある上野公園は高地の水平な拡がり、しかも山手線が作る環の水平位より高いところである。

不忍池は山手線の円運動の内に抱かれて同心円をなし、外環の岸は上野公園の麓に接している。池の水は都市の地表の揺れを測る水準器となっている。

美術館の床面もこのような多層の水平面の一部である。ということとは今回の企画が美術館にそのような意識を与えようとしていることでもある。

レモンティーを想像してみよう。東京、山手線、不忍池は、レモンの環切りを浮かせ、受け皿に載ったティーカップのようではないか。

航空機が着地するように、また飛行艇が湖面に着水するように、或はスペースシャトルが着陸、着水するように、そしてこの美術館の水平面に仮想した地表、薄い移動式絨毯のような地表に、レモンティーに浮くレモンの環のような地表に、それらは微かに浮かびながら滑り込む。すべては地表

## 展覧会予定

(2002.11 ~ 2003.2)

### 大学美術館本館

開館3周年記念

『ウィーン美術史美術館名品展～ルネサンスからバロックへ～』

12月23日(月)まで 入場料1300円

退官記念展

『二箇所 絵画場から絵画衝動へ 中西夏之』

『BREEZE (ブリーズ) 宮下安弘』

1月9日(木)～1月26日(日) 入場無料

第51回卒業・修了制作展

2月21日(金)～2月26日(水) 入場無料

15年4月開催展覧会予定

(仮) 日本近代美術展

4月3日(木)～5月11日(日) 34日間

### 陳列館

(仮) 大学院美術研究科博士後期課程研究発表展

12月～2月の間

入場無料

伊藤廣利遺作展

『鍍金 伊藤廣利の世界』

11月7日(木)～11月24日(日) 入場無料

### 取手館

美術学部取手校地創作展

12月7日(土)・8日(日)

入場無料

開館時間は、いずれも10時～17時。月曜日休館。ただし月曜日が祝日の場合、開館することがあります。

展覧会の名称・会期については、変更することがあります。

本学には駐車場はありませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

展覧会についてのお問い合わせ

東京芸術大学大学美術館

Tel.03-5685-7755

NTTハローダイヤル

Tel.03-5777-8600

展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

「豊饒なる空間の造形」を目指し、それをどう伝えるかを創作活動の原点としてきた宮下安弘教授の退官記念展である。造形家として、さらに教育研究者としての創作領域は、グラフィックデザイン・スペースデザイン・コマースシャルフィルム製作・純粹映像作品・陶器造形と多岐にわたり、その時々に変身・変貌を重ねる氏の

多才さに改めて驚かされる。しかし、結果生み出された物には、「一貫した確かなもの」が流れている。やがて作品を見ているうちにそれは「優しさ」であり、「物を見る真摯な目」であることに気付く。そしてこれこそが人々に「安らぎ」と「リアリティある感動」をもたらすと言えよう。作者が目的とする「豊饒なる空間の造形」そして

# BREEZE(ブリーズ)

## 宮下安弘

### 「優しさ」「物を見る真摯な目」とは何か 箕浦昇一

上に在るのではなく、単に位置している。即ち、地表に触れることなく隣接している。それは当然のように、絵画を響かせるための振舞いの場である。それは当り前すぎるくらいに素朴であり基礎的である。遠くに巨大なものがあり近くには微細なものがあふ、というわけではない。非常に微細なものは遠くにもあり、近くにもある。近くと遠くは微細なものによって繋がっている。響かせるとはそのための遠隔操作である。

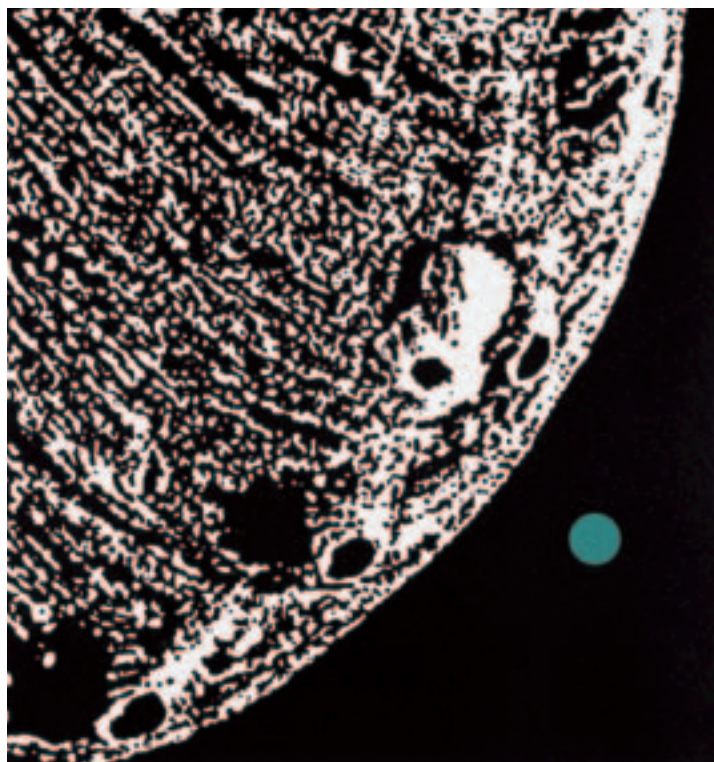
ここでは微小のモノ、それらの単位、スケールを感じさせるものも置かれるだろう。そこでは紫色が使われるであろう。緑色も

あるであろう。それらは瞬きを拒否した白の強さ、包容性、眩しさのためのものとなるであろう。

用意をされるモノの幾つか

紫色色材  
白色砂状アルミナ・ホワイトモランダム  
黒色砂状ケイ素 カーパーラナム  
鋼小球8mm  
その他 絵画、ドロインクなど。

(なかにし・なつゆきノ美術学部油画科教授)



「遊」リトグラフ+シルクスクリーン

それを如何に伝えようとしているか、という仕事はこの現代社会に「優しさとは」「リアリティある感動とは」を問いかけ確認する作業であると言える。

そして今回の展覧会はそれを確認できる展覧会といえよう。新作の陶器造形による

空間照明インスタレーション・映像作品・グラフィック作品から旧作の版画・コマースシャルフィルムまで全四 点の展示となる。(みのうち・しょういちノ美術学部デザイン科助教授)



# 秋から冬への奏楽堂 2002.11>>>2003.2

## オルガン+ シリーズ 「場」と結びつき、「場」に供せられるための音楽



「オルガン+ シリーズ」より ©竹原伸治



「オルガン+ シリーズ」より ©竹原伸治

### 鈴木雅明

きもの。あるいはきらびやかな宮廷の真っ白な建物の一端を占める礼拝堂に鎮座すべきもの。オルガンを連れ出すことが叶わぬなら、ここで演奏するに際しては、何とかオルガン音楽が生まれ得た「場」をもっともここに引きずってゆくことはできないかと、夢見たのでした。

それが、オペラ科の国松さん(演出)の協力で、ひとつの形となって実現しました。オルガンを演奏する時には、ただ虚しく横たわる巨大なステージに、地がすりを敷き柱を立てるだけでも、そこにはある種の「場」が演出されます。しかし、それだけでなく、役者の海堂さんとその仲間のお蔭で五月にはブクステフーデやシュニットガーが登場しましたし、六月には中世の民衆が現れ出ました。また九月にはヴェルサイユ宮殿の貴族が訪れ、十一月には、バッハの妻たちの思い出話を聞きながら、オルガン音楽の真骨頂を味わっていただきたいと考えています。

この企画は、立派な現代風コンサートホールに対する、ささやかな抵抗の試みなのです。まだコンサートホールが存在していなかった頃の音楽を、如何にしてコンサートホールで命を与えるか、これは、淡水魚を海水の中で生かすより、はるかに難しいことに違いありません。(すずき・まさあき/音楽学部古楽科・オルガン科助教役)

日本で演奏するヨーロッパ音楽のなかでオルガンほど扱いにくい分野はないでしょう。というのは、コンサートホールにオルガンを建造するという発想自体が、オルガン文化の歴史に大きく逆らったことだからです。オルガンに限らず一八世紀までの音楽は、決して抽象的な存在ではなく、非常に具体的にある種の「場」と結びつき、その「場」に供せられるために書かれて来たのです。「場」は決して「場所」ではありません、むしろその音楽の「目的」とでもいってべきもの。その音楽が本来供せられるところの「機会」、あるいは「儀式」。またその演奏に際して聴衆と演奏者が共に置かれていたはずの視覚的な「環境」、あるいは「空気」。それが時として音楽の内容にも深く関わっているのです。教会であれ、宮廷

であれ、あるいはそれらを模した劇場であれば、はたまた青天井の広場でさえ、それぞれの「場」に応じて音楽は変化し、音楽はむしろその「場」のために書かれてきたのです。ですから「場」は、音楽のあり様を規定する根本的な概念といってもよいのです。

一九世紀以降に発展したコンサートホールというものは、このような発想から決定的に一線を画すものです。どんな種類の音楽であっても、一様に同じ環境のなかで抽象化し、音楽的要素のみを抽出して聴衆の前に提示する。これが、コンサートホールの発想だからです。

私たちの新奏楽堂に、オルガン建造の鬼オカルニエとユニークな音響設計によってすばらしい環境が完成した時、私は、この

## 芸大定期邦楽 第六五回演奏会

未来への視野に立つ伝統芸術の生き様

野村四郎

邦楽は本年度より、学校音楽教育において必修になり、その必要性が大いに叫ばれ

るなか、邦楽定期演奏会は本年十二月で第六五回目を迎える。例年、六月と十二月に

## 奏楽堂演奏会予定

(2002.11~2003.2)

### 定期演奏会・特別演奏会予定

11月2日(土)

「うた」シリーズ

奏楽堂に響く声2002

第4日 Pleasure of Vocal Ensemble - 重唱の楽しみ -

17:00開演 1,800円(自由席)

[曲目]《サルヴェ・レジーナ》より(ベルゴレージ)

《夕べの音楽》より(ロッシニ)

《スペインの歌遊び》より『最初の出会ひ』ほか(シューマン)

《二重唱曲集》より『渡り鳥の別れの歌』ほか(メンデルスゾーン)

四重唱曲《愛の歌》より(ブラームス) ほか

[出演]伊原直子、鈴木寛一、多田羅迪夫、近藤政伸、佐々木典子、日比啓子、平松英子、大学院学生ほか

東井美佳、奥 千歌子、鈴木真里子、高木由雅、千葉かほる、山口佳代 ほか(以上ピアノ)

11月5日(火)8日(金)

室内楽特別演奏会 ~ハイドン弦楽

四重奏曲全曲演奏シリーズその4~

18:30開演 1,300円(自由席)

第1夜(5日)

[曲目]弦楽四重奏曲 変ホ長調 Hob. :6 (作品1-0)

ピアノ三重奏曲 変イ長調 Hob. :14 ほか

[出演]クワルテット エクセルシオ (Vn.西野ゆか、遠藤香奈子 Va. 吉田有紀子 Vc.大友 肇)

Pf.青柳 晋 Vn.玉井 菜採 Vc.河野文昭

第2夜(8日)

[曲目]弦楽四重奏曲 二長調 Hob. :42 (作品33-6)

弦楽四重奏曲 八長調 Hob. :72 (作品74-1)

ソプラノとオーケストラのためのカンタータ

《哀れな我ら、哀れな祖国》Hob.XX a:7 ほか

[出演]クワルテットリベロ(東京芸術大学大学院生)

(Vn.野村良子、徳永友美 Va. 中島悦子 Vc.中島恵子)

Sop.嶺 貞子 Sop.馬原裕子 Sop.辻 由美

オーケストラ:東京芸術大学教官と大学院生

11月10日(日)

オルガン+ シリーズ 第4回

15:00開演 1,800円(自由席)

《バッハの思い出》ふたりの妻、天国でバッハを語る

[曲目]モテット『主に向かって新しき歌を歌え』

ブリュードとフーガ ト長調

パッサカリアとフーガ 八短調

アンナ・マグダレーナの音楽帖より(以上J.S.バッハ) ほか

[出演]廣野嗣雄・鈴木雅明(オルガン)

鈴木雅明(チェンバロ)三宮正満(オーボエ)

前田リリ子(フルート)野々下由香里(ソプラノ) 芸大声楽アンサンブル

11月22日(金)

芸大定期 合唱・

オーケストラ第301回

18:30開演 1,800円(自由席)

[曲目]『ドイツレクイエム』『アルトラブソディ』(J.ブラームス)

[ソリスト]永々 京子(ソプラノ) 原田圭(バリトン)『ドイツレクイエム』

木下泰子(アルト)『アルトラブソディ』

[指揮]ハンス=マルティン・シュナイト

[合唱]東京芸術大学音楽学部声楽科学生

[管弦楽]東京芸術大学管弦楽学部(芸大フィルハーモニア)

11月29日(金)

芸大定期 オーケストラ第302回

~学生オーケストラ演奏会~

18:30開演 1,300円(自由席)

[曲目]交響詩「ドンファン」作品20 (R.シュトラウス)

交響曲第3番ヘ長調作品90(ブラームス)

[指揮]佐藤功太郎、小田野宏之

[管弦楽]東京芸術大学音楽学部学生オーケストラ

12月3日(火)

芸大定期 邦楽第65回

17:30開演 1,800円(自由席)

[曲目]邦楽離子 「三番叟組曲」

日本舞踊・常磐津「千代の友鶴」

能楽「土蜘蛛」

箏曲「大和の春」

尺八「創作 彩画」

長唄「雪獅子」

箏曲「創作 瑞祥飛天 ~奏楽堂開館記念曲~」

[出演]各講座の教官及び学生

12月4日(水)

芸大定期 吹奏楽第68回

18:30開演 1,300円(自由席)

[曲目]ロメオとジュリエット(S.プロコフィエフ)

ルスランとリュドミラ序曲(ゲリンカ)

世界三大マーチ集 ほか

[指揮]ゲルノート・シュマルプス

[演奏]東京芸術大学音楽学部管打楽器専攻学生

12月14日(土)

御徒町中学と芸大生による演奏会

14:00開演 入場無料

[曲目]未定

[指揮]未定

[演奏]御徒町中学校生徒と東京芸術大学管打楽器専攻学生

1月25日(土)

ビューイグ・ロジェ先生追悼演奏会

18:00開演 1,800円(自由席)

[曲目]オルガン曲

三楽章の組曲(2曲とも ビュイグ・ロジェ)ほか

前奏曲集より 抜粋(メシアン)

ラ・ヴァルス(ラヴェル)ほか

[出演]今井奈緒子(オルガン)、佐久間由美子(フルート)、吉野直子(ハーブ)、藤井一興(ピアノ)、向山佳絵子(チェロ) ほか

芸大定期 室内楽第29回

第1日

18:30開演 1,300円(自由席)

2月13日(木)

モーニングコンサート 第12回

11:00開演 入場無料

[曲目]ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調 (F.リスト)

[ピアノ]山本佳澄

[曲目]ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 (P.チャイコフスキー)

[ピアノ]大川香織

2月13日(木)

芸大定期 室内楽第29回 第2日

18:30開演 1,300円(自由席)

2月16日(日)

舞曲の系譜

15:00開演 1,800円(自由席)

2月23日(日)

楽器シリーズ

15:00開演 1,800円(自由席)

平成14年9月25日現在の予定表です。今後、演奏会の曲目・出演者については、変更することがあります。

演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表します。

<http://www.geidai.ac.jp>

本学には駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

チケットの取り扱い

チケットぴあ03-5237-9990/東京文化会館チケットサービス03-5815-5452/東京芸大美術館ミュージアムショップ03-5685-1176

上記の演奏会のほか、「学内演奏会」の日程については、下記にお問い合わせください。

チケット・演奏会などのお問い合わせ先

演奏芸術センター演奏係

03-5685-7700

定期演奏会を行っているが、六月では伝統的作品を取り上げ、また十二月にはオリジナリティーのある作品を中心に、プログラムを構成している。

今回は、邦楽離子「三番叟組曲」・尺八「彩画」・箏曲「瑞祥飛天 奏楽堂開館記念曲」などの創作作品を始め、箏曲「大和の春」・長唄「雪獅子」の近代の作品に加え、日本舞踊・常磐津による「千代の友鶴」・能楽「土蜘蛛」の伝統的作品を網羅した、多彩なプログラムとなっている。

邦楽科では定期演奏会開催当初から、「同じ舞台を通しての教育」を最重要課題として掲げており、教官と学生の共演という、学生にとっては有意義で、貴重な体験を持つてる場となっている。このことは、学生諸君の卒業後の演奏活動にも、大いに有益となると思う。

近年邦楽科では、各講座が互いのジャンルを乗り越える、真のアンサンブルの充実を目指しており、その総決算として本年五月には、演奏芸術センター、並びに美術学

部のご協力を得て、本学奏楽堂に於いて「熊野の物語」を上演するに至った。このことは邦楽科有史以来の快挙として、特筆すべきことである。

伝統芸術は、兎角「古い」というイメージが強いが、未来への創造的視野に立って今日に開花してこそ、伝統芸術の生き様であると言える。

(のむら・しろう/音楽学部邦楽科教授)



芸大定期邦楽63回演奏会より 能「船弁慶」